

# 中海浅場機能基本調査

(宍道湖・中海水産資源維持再生事業)

道根 淳

## 1. 研究の目的

中海本庄水域においては、西部承水路の撤去、森山堤の開削が予定されており、これが実現すると魚介類の移動可能な中海最大の浅場になることが想定される。また堤防開削により、閉鎖性水域であった本庄水域の環境に変化が生じ、さらには中海の魚介類資源に大きな変化が生じることが予想される。そこで、アサリ等有用魚介類の開削前後の資源状況および環境の変化を把握し、これら資源の増殖方法や有効利用方法について検討する。

## 2. 研究方法

### (1) 漁業実態調査

有用魚介類の季節変動を把握するために、柁網、刺網各漁業において標本船野帳調査を行った。また、松江市本庄町、八束郡東出雲町地先に設置してある柁網の漁獲物の買取り調査を月1回実施し、大きさ(mm)、体重(g)を計測し、主要種については雌雄の判別を行った。

### (2) アサリ・サルボウガイ分布生態調査

中海におけるアサリ・サルボウガイの分布状況を把握するために、スミス・マッキンタイヤー採泥器による採泥を6回/年(偶数月に調査実施)を行った。調査点は、本庄水域に8定点(年度途中で西部承水路堤撤去工事のため2～3定点欠測)、中浦水門～境水道に3定点、中海南岸に3定点設けた。試料は、目合1mmの篩で選別後、直ちに10%ホルマリンで固定して、持ち帰った後、アサリ、サルボウガイの選別を行った。

### (3) サルボウガイ天然採苗試験

大根島東沖、東出雲町崎田鼻沖に、7月から11月にかけて採苗施設を設置し、天然採苗試験を行った。採苗器は水深1, 2, 3, 4mに設置し、付着基質には定置網古網を使用した。

また稚貝の付着にどのような基質が適しているのか検討するため、付着基質比較試験を行った。付着基質には定置網古網、パールネット、

竹枝を束ねたものの3種を用い、採苗器の設置方法は天然採苗試験に準じ、8月から12月にかけて大根島東沖に設置した。両試験とも、回収後、生貝、空貝の選別を行い、個体数と殻長を計測した。

## 3. 研究結果

### (1) 漁業実態調査

標本船野帳調査：刺網ではスズキ、ボラが漁獲の主体であり、1日当たりの漁獲量は30kg前後で推移した。柁網ではスズキが漁獲の主体であったが、今年度は夏季にヨシエビ、ガザミ類が多く混獲された。

漁獲物買取り調査：本庄地先では春から秋はサッパが、冬はマハゼが優占種となった。また、春季にはコノシロ、アユ(稚魚)の占める割合も高くなった。一方、東出雲地先では、7～12月はサッパが優占種となったが、季節によりヒイラギ、アユ(稚魚)、スズキ、ボラが優占種となった。

### (2) アサリ・サルボウガイ分布生態調査

アサリ稚貝は春から夏前にかけて、本庄水域以外の調査点で確認されたが、その後、夏から秋にかけてほとんどの調査点において生息数が急減した。また、殻長組成より8月には春生まれ群の、そして2月には秋生まれ群の新規加入が確認された。肥満度は、5月に最も高く、その後9月にかけて低下するが、冬から春にかけて回復する傾向が見られた。

### (3) サルボウガイ天然採苗試験

付着稚貝の成長は、昨年と同様、東出雲側が良い傾向が見られた。また、付着基質のかぶせ網に目合の大きいニンク袋を使用し、さらに採苗器垂下時期を8月から7月に早めたところ、昨年よりも大型の種苗が得られ、付着稚貝数も大幅に増加した。

付着基質比較試験では、竹枝を束ねたもので多くの付着稚貝を得ることが出来たが、他の基質に比べ斃死貝の割合が高い傾向が見られた。